

95. 人口減少社会における産業と文化によるアフーマティブアクション

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授 住友 文彦

概要

本研究では、展覧会鑑賞者へのインタビューとそこから導き出した鑑賞経験を参考にしながら、和歌山県でみかんの生産者とアーティストが協働するアートプロジェクトの参加者の経験について調査をおこなった。食糧生産が盛んにおこなわれる地域は人口減少をはじめとする社会課題と直面するケースが多く、すでに多くのアートプロジェクトがそれらと向き合いながら実施されている。また地域社会と関わる芸術実践は、展覧会のような方法で作品鑑賞をおこなうのとは異なり、比較的少人数の参加者が継続的に深い経験をするという特徴がある。手法としてはワークショップやレクチャーなどの形式を使って、学びのプロセスを重視する傾向があり、教育や社会的包摂と結びつくのも重要な意義である。しかし、いっぽうで数や効率性を重視する定量評価において不利であるため、参加者の経験を詳しく分析することで、どのような意義があるのかを明らかにすることが求められている。

作品の解釈を中心にした鑑賞経験の分析ではなく、私たちは鑑賞者/参加者自身の個人的な経験が強く反映され、作品制作者の意図やメッセージを経由して、再度日常生活に戻っていく経験にもっと眼を向けるべきではないかと考えた。それらは作品の解釈が不十分であるとみなされ見過ごされがちだが、実際には美術の鑑賞/参加経験において非常に多く見られるパターンである。これは、作品や展覧会の意義を強調するために鑑賞経験がそれらによってどう構築されているかに眼を向けるのではなく、鑑賞者の内面で起きていることを重視し、さらに芸術以外の領域との間を行き来するエージェントとして理解する試みである。鑑賞や参加の経験を対象と主体に分けず、個人の内面から作品へと向かうベクトルが再び個人へと戻ってくる運動として捉える鑑賞経験を、私たちは生成型鑑賞ととりあえず呼んでみることにした。生成型鑑賞は、個人に社会が求められる能力や成果の指標を回避し、予測不可能で生き生きとした経験のあり方を示唆してくれる。さらに、それを実現している語りと共感の実践についても考察をおこなった。

背景および目的

芸術作品において鑑賞者の関わりかたを重視する傾向はすでに一世紀以上の歴史を持っている。しかし、作品や作家の研究に比して鑑賞者の経験を分析する研究は重視されてこなかったといえる。近年は、ニコラ・ブリオーが提唱した「関係性の美学」をめぐる一連の議論と、コミュニティに関与するアートプロジェクトの増加によって、「参加」という行為に着目する傾向が見られる。さらに、リーマン・ショック以降強まる美術市場への抵抗や、コミュニティに根差した非欧米圏の美術への関心の高まりなどによって、展示室における作品鑑賞にとどまらない鑑賞や参加の経験が重視されるようになってきている。

先行研究として検討したものには、上述以外に国内の研究として芸術鑑賞によって創造性が増長されることを確認する教育心理学や、芸術祭やアートプロジェクトによってコミュニティのソーシャルキャピタルが強化されると考える公共政策や社会学の成果がある。こうした議論において目立つのは、ソーシャリー・エンゲージド・アートという言葉が示すように、制作者や鑑賞者の能動的な参加や関与を前提にしていることである。しかし、

積極的な関与を前提とした鑑賞だけでなく、もっと幅広く芸術作品における鑑賞や参加行為の役割を考察する必要性があるのではないだろうか。そう感じていた折に、研究室の学生のなかに芸術活動のコミュニティへの関与について研究する学生と、映像作品の鑑賞経験について研究する学生がいたので、2023 年度後期の演習では美術作品の鑑賞経験について聞き取りをおこない、それらをめぐる議論をおこなった。

その後、地域社会と関わる芸術実践が目指す少人数の参加者がワークショップやレクチャーなどの形式を使って、長い時間かけて関与する和歌山県田辺市におけるアートプロジェクトの参加経験を調査した。いっぽうで、この研究は特定のアートプロジェクトの分析に留まらず、現在日本や東アジア地域で盛んに実施されている芸術祭やアートプロジェクトについて考えるための視座を与えてくれるものと考えられる。

方法

調査の手順としては、アーティストの廣瀬智央氏が紀南アートウィークと実施している《コモンズ農園プロジェクト》に参加している農家、ワークショップ参加者、運営スタッフへのインタビューをのべ 10 名に対して実施した。時期は 2023 年 11 月 29 日から 30 日、2024 年 3 月 5 日から 8 日、2024 年 9 月 27 日から 29 日の 3 回に分けて実施した。

この調査は、最後に参加の経験について調査した内容をアートプロジェクトの参加者と地域の人たちに向けて伝えるメディアを作成することを目指していた。そのために、写真家の築山礁太氏に参加を依頼し、写真撮影をおこなった。築山氏とは初回のインタビュー内容の検討をおこなったうえで、実際に《コモンズ農園プロジェクト》が実施されている田辺市と白浜町と一緒に訪問し、第二回目のインタビューにも同行してもらい、写真撮影をおこなった。

この時点で、撮影した写真とインタビューの言葉をもとに作成するメディアの形式を私たちは検討した。撮影した写真とインタビューから抽出する言葉を確認しながら、制作するメディアは高齢の地域の人たちも手にとって見ることができるように印刷物の形態を持つことが望ましいと考えた。一番判断が困難だった点は、インタビューで語られる経験は明確な輪郭を持つものが少なく、そうした曖昧なイメージを他人と共有するメディアにどのような役割があるかについて考えることだった。これに関して築山氏は写真加工技術によって撮影された対象が何なのか判然としない画像を加えることを提案した。これらの特徴は、じつは《コモンズ農園プロジェクト》が最終形を持たないまま現在進行している状態で参加している経験とじつは共鳴する点なのではないかと考えられたことで、印刷物としてメディアを作成するプランが前に進むことになった。

結果および考察

アーティストの廣瀬氏は、長年暮らすイタリアで体験する洋の東西、貧しさと豊かさ、有機物と人工物などの違いについてどちらかだけではない、両者の複雑な関係性をそのまま指し示すような作品をこれまでも制作してきた。また、ワークショップや地域との関わりにおいても、すぐに成果を見出すのではなく長い時間をかけることを意識している。

農業従事者は、都市を中心に成長する社会において周縁化され、後継者不足や地方の衰退などの課題と日々向き合っている。肥培管理の強化と品種系統の改善によって食糧不足にも市場の変化にも対応してきた。また、このように技術による解決を試みても次の倫理的問題が生じる状況に直面しているのは、もちろん農業従事者だけではない。

《コモンズ農園プロジェクト》は課題解決や新しい農業実践を目的にしているわけではない。しかも農業の専門家が中心にいてわけではないので農業実践の求心性は薄い。さらにアートの実践としても、参加経験を作品における創造性の発揮に向けているわけではない。むしろ、能動性が緩められていることで、文化的な制約や想像の限界を超えて複雑な倫理的問題と向き合う状況を作り出し、自由に安心して、複雑な現状をそのまま見つめることを促している。地域共同体の紐帯から自由になり、機械化、フードロス、省農薬などの話題を語り、自分の感覚を自由に解き放つことを優先させている。そこで農業従事者とそれ以外の人たちが個人の経験を語りなおし、それらが聞かれ、他者と共有する機会がつけられる。これは、人口減少や食糧生産をはじめ地域社会が直面する

難しい課題と向き合う一人ひとりがエンパワメントされる方法の一つを指し示しているといえるのではないだろうか。

作品鑑賞が創造性をうみだすことを認める教育心理学や、芸術祭やアートプロジェクトがコミュニティのつながりを強化する社会学などの先行研究では、鑑賞者や参加者の能動的な関わりが不可欠だった。いっぽうで、目的が共有されておらず、終わりもない漠然とした非能動的状态で実施されている《コモンズ農園プロジェクト》においても個人の日常に根ざした経験が「語りなおし」の機会を提供している。また、「語りなおし」が実践され他者と関わりを持たない場合でも、個人の感覚をもとに文化的な制約や想像の限界に気づく機会が提供されることで、他者への共感を生み出している可能性もある。参加や創造といった能動的な行動は、競争や課題解決を求められる現代社会において重視される傾向にあるが、こうした複雑さに耐える共感力にも芸術の可能性が認められていいのではないだろうか。

また最後に、この研究のために実施した調査も、参加の経験が語られる機会をつくりだしていた。重要なのは、語られる内容や個人の変容だけでなく、こうした語りがネットワークのようにして流れる状態をつくりだすことではないかと考えられる。つまり、すぐには言語化されない非能動的な経験を語り、それが聞かれる機会を増やすことである。事業の実施や参加は年に数回程度に機会が限定されるので、今回私たちは調査をもとに写真と取材で語られた言葉、そして詩の言葉を掲載したフォトブックを作成した。それが、《コモンズ農園プロジェクト》がうみだした「語りなおし」の網の目の一端を担うことを願っている。

(完)

発表論文

- 1) 「日常の経験と連続する鑑賞/参加」

引用文献

- 1) 石黒千秋, 岡田猛(2015)「芸術表現経験と表現への有能感, 鑑賞態度が触発へ及ぼす影響」日本認知科学会第32大会
- 2) 森千鶴子, 高詩関, 佐々木奏, 朝廣和夫, ほか(2022)「中山間地域における地域固有性に着目した芸術活動:《八女茶山おどり》制作プロセスの分析からみるコミュニケーション」芸術工学研究 37, 九州大学大学院芸術工学研究院
- 3) 中村美亜(2019)「芸術における共創の再考-創造とエンパワメントのつながりを探る-」共創学 vol.1(1)